DECADE FINAL EPISODE OF KUUGA

トマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＥＣＡＤＥ　ＦＩＮＡＬ　ＥＰＩＳＯＤＥ　ＯＦ　ＫＵＵＧＡ

【Ｎコード】
Ｎ９４１０Ｋ

【作者名】
トマト

【あらすじ】
剣崎一真の変身する仮面ライダーブレイドの前に敗れ、行方をくらましてしまった門矢士。小野寺ユウスケは仲間として士を救うべきか、剣崎達と共に士を倒して世界を守るべきなのか、その二つの問題を前に決断できずに苦悩してしまう。だがそこに１人の青年が現れ、彼と話をしていく内にユウスケの決意は固まっていく……。
（テレビ版ディケイドの最終回。その裏側を私なりに想像して綴った物です。）

（前書き）

どうも、ディケイド小説をもう一作書いていますトマトと申します。皆さんにはかなりお世話になっている未だ未だ青い野郎です。

今回書きましたのは、ディケイドで準主役を勤めた小野寺ユウスケを主役とした裏側のストーリーです。少し無理矢理な所が幾つか見られますが、どうぞ最後までお楽しみ下さい……。

では、始まります！！

「うあぁあああああああっ！！？」
コンクリートで作られた白い橋の上。数人の者達が見守る中、今此処で１つの戦いの幕が下ろされた。
剣崎一真が変身した黄金の重装甲を纏う仮面ライダーブレイド、キングフォームの必殺技であるロイヤルストレートフラッシュの斬撃波を受けて、門矢士こと仮面ライダーディケイドは何も出来ないまま敗北した。
彼はそのまま真っ直ぐ壁に激突。その破壊力の前に橋の壁をも突き破り、何１０ｍもの高さから橋下にへと落下していった……。
「士ぁあああああっ！！？」
士の仲間、小野寺ユウスケが慌てて橋の下を覗き込む。
だが彼の姿は全く見えない。瓦礫だらけで落ちた人間が助かる可能性など殆ど無さそうであった。
「つ、士？　そんな、お前が……！？」
ユウスケの表情は誰から見ても解る位に笑顔とは全くの正反対であった。
夏海がスーパーアポロガイストによって拐われ、これまで世界の融合の原因が彼にあると考えていたのが突然現れた剣崎によって否定された。更に彼はその原因はディケイドである士にあり、世界の崩壊を止めるには彼を排除する必要があると彼を完膚無きまで叩きのめしてしまった……。
「無駄だ。…ディケイドは死んだ。小野寺ユウスケ、お前達の旅もこれで終わりだ。」
そんな時、変身を解いた剣崎がユウスケの方にへと歩み寄ってきた。
直接キングフォームにへと変身出来る彼には、例えユウスケがク

ウガになっても勝つのは不可能。この場にいる他のライダー、キバのワタルや響鬼のアスム、ディエンドである海東は既に何処かに行ってしまって不在だが、彼等２人と手を組んでも勝つのは難しい。それが解ってるからか、彼等は剣崎に戦いを挑もうとはしなかった。

「そんな筈無いっ！！　士が死んだなんて……俺は絶対信じないっ！！」

だが、それでもユウスケは士が死んだという事には断固否定した。

自分の知る彼は、今までどんな窮地に陥っても、それでもライダー達と協力してその困難を乗り越えてきた。

そんな彼があんな攻撃一発で死ぬ筈が無い。例えその可能性が９９％、いや１００％だったとしてもそんな事は信じたくない……。

そんなユウスケを剣崎は冷め切った目で見詰めている。ワタルとアスムの２人も、とてもやりきれない目で彼を見ていた。

「ワタル、アスム！　俺と一緒に士を捜すのを手伝ってくれっ！！？」

「ユ、ユウスケ…。」

「……ぅうっ…！？」

ユウスケは２人に士の捜索を手伝って貰うために叫ぶ。

だが２人は何故か首を素直に縦には振らない。２人の少年は目線をユウスケから反らし、彼と真ともに話そうとはしなかった。とても申し訳無さそうな表情で……。

「どうしたんだ……ワタルッ、アスムッ！！？」

「未だ解らないのか！！　その２人の気持ちが……。」

彼等に呼び掛けたユウスケに向かって、今まで冷酷に静かに対応していた剣崎が声を荒げた。その表情も何処か苛々しているのか、眉を寄せている。

「士が存在している限り、２人の世界。…いや、お前達全員の世界に安息の時は無い！！　それでも未だ彼等がディケイドに味方をすると思うか？」

「そ、それはっ！？」

ユウスケにも薄々理由は解っていた。彼等は自分達の世界と士を天秤に掛け、それに深く悩んでしまっている事を……。
「すまない。…ユウスケ。」
「僕達は世界の仲間を見捨てる訳にはいかないんです。」
謝罪の言葉を呟く茶髪の少年ワタル、そして仲間を見捨てられないと嘆く青い胴着を着た少年アスム。彼等は自分の命以上に自分達の世界を大切にしている。
だから彼等は例え仲間の士とはいえ、素直に首を縦に振れなかったのだ。
現に先程士に協力した剣立カズマはブレイドの世界と共に消滅している。それを目の当たりにしたのもあって、その事実と恐怖は本物なのだ……。
特にアスムは既にこの世界で2人の仲間を失っている。世界を守ろうとする意思はこの中の誰よりも強い筈、士の為に仲間を犠牲になんて彼には出来ないだろう。
「よく考えるんだな小野寺ユウスケ。…お前のクウガの世界とディケイド、どちらを優先するか……。」
そう言って剣崎はワタルとアスムを連れて何処かにへと立ち去ってしまう。
「……。」
ユウスケは何も言い返せず、たった1人でそこに佇む事しか出来無かった……。

「俺はどうしたら良いんだ？　仲間とクウガの世界、どっちを守れば良いんだ……？」
あれから30分近く、ユウスケは唯トボトボと肩を落として歩くだけであった。
結局彼はどちらかなんて選べなかった。剣崎に付いていく事も出来ず、士を救出に向かう事も出来無かった。

彼はそんな優柔不断で情けない自分を殴りたくて仕方無かった。
今彼の両目からはポロポロと悔し涙が溢れている……。
「泣かないで下さい。」
「えっ？」
そんな時、突然ユウスケに誰かからの　声が掛けられた。ユウスケも知らない男性の声、直ぐに顔を上げて辺りを見回した……。
思った通り簡単にその人は見付かった。年齢は見た感じ３０代で黒い髪を後ろで結び、剣崎と同じ様に彼は黒いスーツに身を包んでいた。
だが冷酷に事を運ぼうとしていた彼とは違う。無表情で冷静な剣崎とは対照的に彼はにっこりと笑っている。
「これを使って下さい。…俺、誰かが泣いてるのはあまり見たくないんです。」
「えっ？　あ、あの……？」
彼はスーツのポケットから取り出したハンカチをユウスケに渡し、涙を拭いて貰おうとしていた。本人はかなり戸惑っていたが、折角渡してくれたハンカチだったので、素直に涙を拭く。
すると彼は更ににっこりと笑った……。
「君の友達が待ってるよ。早く行ってあげてね？」
「えっ？　あ、あの貴方はっ……！？」
ハンカチを返す暇も無く、男性はユウスケの前から姿を消してしまっていた。さっきの様に辺りを見渡しても、先程のあの笑顔を再び見る事は出来無かった……。
「今の人は？　それにあの服は剣崎って人のと同じ……。」
手に持ったハンカチを仕方無くズボンのポケットに仕舞い、彼はまた宛も無く歩き出した。

また数分後、彼は何時の間にか屋外から屋内にへと移動していた。まるで先程の男性に案内されたかの様に、彼の足は真っ直ぐに迷わ

ず此処に向かっていったのだ。
駐車場だろうか。辺りには車しか無い。それに人気も……。
「おいキバーラ。俺を何処に連れてく気だ！」
「ウフフ。…もう少しよ～、ディケイド。」

だがそんな時、突然彼の耳にある者の声が聞こえてきた。その声は間違い無く先程死んだかと思われていた仲間、門矢士の物だ。
「つかさ……？　士っ！！」
ユウスケは急いでその声が聞こえてきた方にへと走り出した。その先には士が居るのだ、走らずにはいられない。
そして見付けた、間違い無くあれは士だ。傷だらけで包帯を一杯巻いているが、やはりあれは仲間の士だ。
だが何か様子がおかしい。士の視線の先には2人の少年、ワタルとアスムの姿が……。
（一体……何が？）
とりあえずユウスケは彼等が何をしようとしているのか、様子を見る事にしてその辺の壁の裏に身を隠す。
士の前に立つ2人の少年は、思い詰めた表情をしていた。その近くにはポケットに左手を入れた剣崎の姿も……。
「士さんお願いです。この世界から出ていって下さい。」
「ディケイドが居れば、僕達の世界は消えてしまいます。」
「犠牲は僕達だけではありません。僕達の仲間も犠牲になるんです。」
「だから俺に……消えろと？」
ユウスケは驚いた。そして悲しかった。あの2人、ワタルとアスムまでもが士を拒絶したのだ。
彼等2人は以前共闘した士よりも、自分達の世界を優先した。それは誰にも責める事は出来ないが、ユウスケにとってはそれが悲しくて悔しくて仕方無かった。

やはり自分も彼等の様に剣崎側に就くべきなのだろうか。
確かにそうすればクウガの世界は救われるし、他のライダーの世界も……。
だがその代わり……。
そうしている間に、既に次の幕が引かれていた。ワタルとアスムの2人がキバと響鬼に変身して人間の士に襲い掛かったのだ。
「士さん。何故変身しないんですか！？」
抵抗する事素振りも見せず、士は響鬼の言う通り2人のライダーの攻撃を受け続けた。
以前の仲間だから攻撃をしたくない。そんな理由からなのだろうか、士はディケイドに変身しようとすらしなかった。
「つ、士っ！？」
思わず感情のままに飛び出し掛けたユウスケだったが、その足は急に動かなくなってしまった。彼の脳裏にある言葉が浮かんだのだ。
クウガの世界消滅という言葉が……。
「がっ！？　ぐはっ！！」
だがそうして迷っている間に、士は次々に2人のライダーから攻撃を受けて、その傷付いた身体を更に痛め付けられていく。包帯からは血が滲み、徐々に赤みが増している。
それを見た時、ユウスケの心からは一瞬迷いが消え去った。
彼はその勢いのまま飛び出して、一瞬の内にクウガに変身。キバと響鬼の腹に掴み掛かり、士から彼等を引き離した。
「士、行くんだ！」
「ユウスケ……。」
2人から見事士を救ったクウガは、彼にスーパーアポロガイストに拐われた夏海を救出に行くように叫んだ。
「ユウスケ、離せっ！！」
「離して下さい！！」
「早くっ！！！！」
今の彼は士を守る為にならキバや響鬼、剣崎のブレイドであって

も戦っただろう。今の彼には士と夏海の事しか頭に無く、自分達の世界なんて全く入っていなかった。
士は自分を救ったクウガに驚きを隠せなかったが、彼の思いを胸に秘めて、彼は夏海を救う為にライダー達から離れていった……。
「……。」
「……。」
「……。」
士がその場から完全に姿を消した事で戦う理由が無くなり、変身を解いて元の人間の姿に戻る3人。気まずい雰囲気、彼等は何も喋る事が出来ずにいる……。
「未だディケイドの味方をするのか！？」
だがその雰囲気を破る者が居た……剣崎だ。彼は険しい顔をしてユウスケに喋り掛けてきた。
すると、ユウスケの頭は一気に冷め、自分が今取った行動の重大さが突然になってのし掛かってきた。今彼を救った為に、ディケイドである士を倒すチャンスを無にしてしまったのだ……。
「夏海ちゃんは……夏海ちゃんは俺にとって大切な仲間なんだ。だからせめて……夏海ちゃんを助けるまでは！」
震える唇で喋るユウスケ、この理由は嘘では無くて本心。夏海は大切な仲間だし、絶対に助けてやりたいのだ。
そして士も……。
「その後はどうなる！！　お前が居たクウガの世界が消えても良いのか？　お前の世界の仲間を見殺しに出来るのか！！？」
「それはっ！？　…それは……。」
だがそんなユウスケに剣崎は鋭い言葉の剣を次々に突き刺した。彼の心をどんどんと追い込んでいく。
もしかすれば、彼はユウスケをも引き込もうとしているのかもしれない。こうして彼も自分達の方に引き込めれば更に戦力が強固となるからだ……。
「士は世界を見捨てた……。」

続けて剣崎は語る。士は世界を捨てて夏海を守ろうとすると……。
これはつまり、彼はこの世界から出ていく事は無い。世界を救うには彼を倒すしかないという意味も含まれている。
その言葉を前にユウスケは完全に困惑。ワタルとアスムの2人もお互いに苦しい表情をして互いの顔を見合っていた。
「こうなったら我々の力で消し去るのみ……。」

あれからユウスケはまたも悩んでいた。先程の決意は何処に行ってしまったのかと思う位に……。
いや、先程以上に悩んでいた。
剣崎は再び2人を連れて、また何処かにへと向かってしまった。おそらく士を追い掛けていったのだろう。結局自分はまたどちら側にも就く事が出来無かったのだ……。
「俺は……最低だ。」
ユウスケは項垂れた。やはり自分の情けなさに……。
こんな時にまで悩んでいる自分。自分よりも幼い2人は既に決意を固めて行動に移っているというのに。
彼等だってかなり苦悩した末に決断した筈だ。なのに自分はいい年して自己決断が出来ずにいる。
本当に最低だ。最低としか形容の仕方が無い……。
「そんなに自分を責めないで下さい。」
そこにまたあの声が……あの時出会った謎の男性の声が聞こえてきた。
またも突然、彼は何処からともなく姿を現した。先程と全く同じ服装、だが表情だけは少し暗い。
ユウスケが落ち込んでいるからだろうか。だから彼も一緒に落ち込んでいるのだろうか……。
「貴方は……さっきの。」
「少しだけ話をしませんか。…気が楽になるかもしれませんよ?」

男性はユウスケと話そうと言う。理由は解らないが、何故かユウスケはそれを断る事が出来無かった……。
「小野寺ユウスケさんですよね？　剣崎さんや紅さんから話は聞いてます。」
「え、ええ。」
地べたであるにも関わらず座り込む2人、先ずは男性の方がユウスケに話し掛けた。
男性の質問に対して、やはり未だ暗い表情と声で返答するユウスケ。失礼とは解ってはいるが、今はどうにも明るくなんてなれなかった。
「俺、五代雄介って言います。名刺忘れちゃったから口で言いますけど、２００９の技を持つ男です。宜しくっ！」
「は、はぁ……。」
男性の名前は五代雄介というらしい。彼は此方が落ち込んでいるにも関わらず、またも笑顔で話している。確か自分はそんな笑顔を守る為に戦っていた筈だ……。
更に奇偶なのが彼の名前も「ゆうすけ」という事。笑顔と良い何か彼からは親近感が伺えた。
だが、それ以上にユウスケには気になる事がある。士の事も気に掛かるが、今は別の事だ。
「あの……」
「ん？　何ですか？」
「貴方も……剣崎さんの仲間なんですか？」
そう、彼もやはり剣崎一真の仲間だという事。
彼は先程剣崎の名前を口にしていた。おそらく彼もまた士を倒す為に他の世界からやって来た仮面ライダーの1人なのだ。
此処で自分と話しているのは、足止めの為なのか。はたまた此方で1人となった邪魔な自分を消し去る為なのか……。
どっちにしろ彼は敵。それだけは事実だろう。
「確かに。…俺は剣崎さんや紅さん。他にも乾さんや天道さんって

人達に呼ばれて、ディケイドを倒す為にこの世界に来ました。」
ほらやっぱり……。
そんな言葉がユウスケの脳裏に浮かび、また何だか悲しくなった。
やはり彼も敵だったのだ。少しでも味方かもしれないと考えてしまった自分が更に情けない。
「でも……俺ホントは戦いたくないんです。」
「えっ？」
だが、五代は突然戦いたくないと言い出した。ディケイドを倒す為にやって来たというのに、戦いたくないとはどういう了見なのだろうか。
ユウスケには想像も付かなかった。
「嫌なんですよ、拳を振るうって。殴ったりする度にとても胸が痛いんです……。」
五代は自分の握った右拳を見ながら、苦しそうにそう言った。
今の彼は笑顔では無い。本当に心から苦しそうで、辛そうにユウスケには見える。
「俺、自分の世界で最後の敵をこの拳で倒した時、心の底から本当に嫌な感じがしました……。」

「…もう二度と笑顔になんかなれない位に……。」

五代の握り拳に力が入る。
あの時の事は未だはっきりと覚えている。九郎ヶ岳での未確認生命体０号、ダグバとの血で血を洗うような拳だけでの戦い。
自分はその時初めて誰かを殺した。確かに変身して怪人達を倒してきた事は幾度と無くあったが、人間の姿のままで倒したのは初めてであった。
嫌な感触。身体を殴り、飛び散って自分に降り掛かる返り血。吹雪の中で嗅いだあの鼻につく鉄錆の臭いは人生の中で最も心地悪かった。

あの後自分はそのまま仲間達に詳しく告げずに冒険に出た。笑えなくなってしまった自分を隠す様に……。
そしてもう１０年近く彼等の顔を見ていない。
当然だがユウスケはそんな事を知る由も無い。彼が何の事を言っているかなんて全く解らないが、何と無く彼には辛い過去があったのだろうという事だけは解った。
そしてそれが今の彼の戦いたくない理由と結び付いている……。
「小野寺さん。やりたくなければ無理してやらなくたって良いんですよ？」
「えっ？」
すると、五代は突然話を変えてきた。
先程まで自分の過去の話をしていたのに、今度はいきなりまた今の事に戻っている。当然ユウスケは思わず間抜けな声を上げてしまった。
「…でも」
しかし五代は更に言葉を続けて、逆説の単語を喋った。
ユウスケは何時の間にか暗い表情から普段のそれに代わり、五代の話を聞き逃さないように全身を耳にして聞き続ける。

「でも、もし出来るなら、精一杯無理してでも頑張った方が良いですよ。貴方が１番したいようにする。それが１番大切な事なんじゃないですか？」

五代はニコッと笑ってそう言った。
その瞬間から、彼の頭の中で色々な事がぐるぐると回り始めた。
自分は何をしたいのか……。
士を守りたい。世界の消滅を防ぎたい。夏海を救いたい。スーパーアポロガイストを倒したい。ライダー達との戦いを止めたい。
様々な思いは彼の頭を覆い尽くしたが、それは徐々にパズルのピースの様に繋がっていった。

そして答えが出てきた。「笑顔を守りたい」という答えが……。
簡単な事だったのだ。士や夏海、皆の笑顔を守る事だけを考えて行動を起こせば良かったのだ。
これが自分。自分が今1番やりたい事なのだ……。
「五代さん。」
「はい？」
「有難うございました！！」
ユウスケは急に立ち上がり、五代に向かってペコリとお辞儀をすると、彼はサムズアップをして、やはりにっこりと笑顔を返してきた。
ユウスケも同じくサムズアップと笑顔で返し、士達の許に向かおうとする。
だがそこに邪魔者が出現した。
「あれは……？」
「ワームにアンノウン。それにオルフェノクも！！」
何とそこに怪人達が出現したのだ。ユウスケの言う通りカブトの敵ワーム、アギトの敵アンノウン。そしてファイズの敵オルフェノクがユウスケ達を狙ってやって来たのだ。
おそらく遂にカブトの世界、更にはアギトやファイズの世界も徐々に融合してしまったのだろう。その為に彼等がこの世界に出現してしまったのだ……。
「五代さん、見てて下さい。俺の……変身。」
だがユウスケは慌てずにゆっくりと彼等と対峙、その表情にはもう迷いなんて見られない。
彼はゆっくりと腹部に手を当てて、銀色に輝く変身ベルト、アークルを出現させる。
そのまま伸ばした右手をゆっくりと左から右にへと移していき、一気に両手をベルトの左端にあるスイッチ部分にへと持っていく。
「変身っ！！」
すると彼の身体は手から足、胴体から頭と徐々に人間の物から姿

を変えていった。
赤い鎧と眼に黄金の角を持つ仮面ライダークウガに……。
変身した彼は掌に拳を打ち、怪人達の群れにへと飛び込んでいった。
怪人達に囲まれながらも、緑色をした気持ちの悪いサナギワームに強烈なキックを叩き込み、そのまま今度は後ろのバタフライオルフェノクに素早くパンチを繰り出す。その調子でクウガは次々に怪人達にへと攻撃を炸裂させていった。
「はっ、だりゃあっ！！　ふんっ、はっ、おりゃあああっ！！」
「……。」
それを見ていた五代は、懐かしい思いが心から溢れ出ていた。
この光景、あの姿、どれを取っても懐かしい。
もう１０年、あれから全く変身していない。破壊されたベルトは、かなり時間が掛かったが持ち前の修復能力で既に回復している。
だからこそ彼等は自分を呼んだ。数あるライダーの中でも究極の力を持ち、更にはそれを完全に制御出来る自分を……。
仮面ライダークウガである自分を……。

「くっ！？　こいつ等ぞろぞろと……。」
一方の戦い続けているクウガ、彼は大勢の怪人によって追い詰められてしまっていた。
目の前に広がる大量の怪人、ワームにオルフェノクにアンノウン。何時の間にかグロンギやミラーモンスターまでも加わっていた。
間違い無い、殆どの世界が融合し掛かっているのだ。もはやその時間が無い……。
それに早くしないと士や夏海達の許にまで駆け付けられない。クウガは慌てながらも敵怪人を擦れ違い際に殴り倒していくが、それでも倒すには至らない。
マイティフォームのクウガでは、唯のパンチで怪人を倒せる程の力は無いのだ。

だがその次の瞬間だった……。

「グギャアアアアアアッ！！？」
「ギァアアアアアアアアッ！！？」
「ガァアアアアアアアアアア！！？」
「な、何だっ！？」

突然敵怪人全ての身体が炎に包まれた。豪々と燃え盛る炎は消える事無く、怪人達の身体を焼き尽くしていく。

それはまるで彼等自身の身体が突然内部から発火した様だった。それだけその炎はとても自然に現れたのだ……。

更にそれだけでは無い。燃え盛る彼等の上空から青空にも関わらず突然飛来した雷が、燃え尽き掛けていた彼等を完全に打ち砕いた。

「か、雷が……？」

怪人達は次々に爆発を起こし、青い炎や緑の炎、普通の赤い炎を上げて消滅していく。その際に出てきた煙がクウガの前方の視界を奪い、彼には何が起きたのか全く解らなかった。

只、あの時誰かが何かをして彼等を倒した。それは間違い無い。だがあんな力を持つライダーなんて存在するのか。幾ら何でも相手を発火させたり雷を操ったりと、ライダーの力の限界を明らかに越えている。

やがて煙は少しずつ薄まっていく。徐々にだが向こう側の景色がクウガの目にも見えるようになっていった。

そこにいたのは……。

「黒い……クウガ？」

煙の向こう、霞んでいるがそこに確かに仮面ライダーは立っていた。黒い身体に黄金の角、少々形状は違うがあれはクウガに間違い無い。

という事は先程の攻撃は彼が行なったという事になる。クウガにあれ程までの力が秘められているというのか……。

「……。」

すると黒いクウガはこちらに向いて、ゆっくりとサムズアップをしてきた。恐ろしい姿と力だが、彼からは全く恐怖を感じなかった。

あの素振り、そしてこの安らぎ感。その全てを併せ持つ者はたった1人だけ……。

「ご、五代さ……っ！？」

眼前に立つ彼に駆け寄ろうとするクウガだったが、近付いた時には既に彼の姿はそこには無かった。

そして完全に消え失せた煙。そこに残っていたのは爆発した怪人達の残り火、そしてたった1人佇む赤いクウガだけ。五代も黒いクウガも姿を消してしまっていた。

「……ん？」

いや、何かたった1つだけ残されていた物があった。1枚の紙切れだ……。

「これは……？」

そこにはアポロガイストの居場所を示す地図が書かれていた。この場所から少し遠いが、ドラゴンフォームのクウガでなら直ぐに辿り着ける距離だ。これもおそらく五代が残していってくれたのだろう。

もう此処まで来たのだ、悩みはしない。彼の言った通り自分が思うように行動を起こせばそれで良い。そして既にその答えは出ている。

「俺は士達と一緒に大ショッカーを倒す。たった1人の笑顔を守れなきゃ、誰の笑顔も守る事なんて出来ないから……。」

小さく「超変身」と呟き、クウガはドラゴンフォームにへとフォームチェンジ。その俊敏な動きを利用して、士達が居るであろう決

戦場にへと猛スピードで走り出した。
仲間達を守る為、未来を変える為の戦いになると信じて……。

「どういうつもりだ……？」
此処は先程の場所から少し離れた森の中。木々が生い茂り、サガが天鬼と轟鬼を葬ったあの場所とそう遠くない場所に位置している。
そんな植物しか無い此処に、あの五代雄介は居た。
五代だけじゃ無い、更に彼に詰め寄ってきた2人の青年。黒い手袋と服、片方は剣崎一真だ。だがもう1人は誰かは解らない。
細身な青年、茶髪で剣崎と同じ様にサングラスを掛けている。おそらく彼もまた別の世界からディケイドを倒す為にやって来た仮面ライダーの1人。
「剣崎さん。乾さん。」
片方の青年、名前は乾巧と言う。彼は尾上タクミとは別の世界から来た仮面ライダーファイズだ。勿論オルフェノクでもある。
「まったく。小野寺ユウスケを味方に就ける処かディケイド側に味方する決断をさせてしまうとは……まぁ良い。」
呆れ果てた口調で喋り掛けてきたのは剣崎だ。彼等は小野寺ユウスケを此方側に引き入れる為に今回五代雄介を彼の許にへと向かわせた。
だが結果は寧ろ逆効果となってしまったが、それもまぁ仕方が無い。
「結局あのキバと響鬼もディケイドに協力して未来を変えると言って我々から抜け出ていってしまった。…もはや猶予は無い。急いで渡や天道達と合流し、ディケイドを抹殺する。」
「あの……その事なんですけど。」
仲間のライダー達に合流する為に歩き出そうとする剣崎と巧。だが五代は何故か歩こうとはせずにそこで立ち止まった。
「何だ」と聞き返す剣崎。すると五代の口からとんでもない言葉

が飛び出してきた……。

「俺……やっぱり辞めときます。今回の戦い……。」

何と彼は今回の戦いに欠場すると言い出した。

流石の剣崎もこれには驚く。この期に及んで戦闘拒否とは正に寝耳に水だ。

「馬鹿な事を言うな！　今ディケイドを野放しにしておけば、どうなるか位解っているだろう！？」

剣崎はそれを断固拒否。巧は静かに2人のやり取りを見守っている。

「でも俺、もう戦いたくないんです……クウガとして。」

「何だとっ……！？」

流石に今の言葉には頭にきたのか、掴み掛かろうとする剣崎。だがそれは巧の手によって抑えられ、今まで黙っていた巧が彼に変わって五代と話し始めた。

「だが、お前はさっきアルティメットクウガになって戦っただろ。」

「あれは……小野寺さんをディケイドの許に行かせたかっただけです。あのままだと長引きそうでしたから……。」

サングラスを外した巧は五代にどんどん詰め寄っていく。

「だが、お前のアルティメットクウガの力は俺達の中でも最強の力だ。お前は俺達の切り札的存在でもあるんだぞ？」

「でも、その俺の力でまた誰かが泣くのは見たくないんです。あんな光景はもう二度と……。」

五代はユウスケが泣いていた場面を見た。彼は自分の板挟みの状況に苦悩し、決断出来ない自分に悔し涙を流していた。

門矢士には彼を含めて未だ沢山の仲間がいる。そんな彼が死んだら、どれだけの人が涙を流すだろう……。

守れなかった事への自責、彼を失った悲しみと悔しさ。きっと彼等は二度と笑顔になれなくなる。

だから……。
「解った。渡や城戸には俺から伝えてやる。」
「乾、お前っ！？」
だが巧はそんな五代を見逃そうと言い出した。勿論剣崎は巧に掴み掛かるが、彼はそれを曲げようとしない。
「有難うございます乾さん。」
御礼を言う五代の前に現れる歪んだ灰色のオーロラ。その先には彼がやって来たクウガの世界が広がっている。つまりは帰り道だ。
五代はそのままそれを目指して歩いていく。
「あの……剣崎さんに乾さん。」
「ん？」
「何だ？」
だがその途中で彼は歩みを止め、背中を向けたまま2人に声を掛けた。2人が軽く応答すると、五代は最後にと話し始めた。
「俺……ディケイドも世界も滅びたりしないと思いますよ。…きっと。」
何と彼は誰も滅びたりはしないと言い出した。つまりそれは世界は消滅しないしディケイドも倒されないという事……。
「何故そう思う。」
剣崎が彼にそう尋ねると、彼はその理由を口にした……。
「だって、これだけ沢山のライダーがいますし。何より俺よりずっと凄いクウガがこの世界に居ますから……。」
そう言って振り向き際にサムズアップ。五代はそのままオーロラを潜り抜けてこの世界から完全に姿を消した。
自分とはまた違う新しいクウガやライダー達に世界の運命を託し、五代は久し振りに仲間の許にへと帰っていったのだった……。
「どうするんだ。五代を行かせたのは俺達にとってかなりの戦力ダウンに繋がるぞ。」

去った五代を見送った後、剣崎は巧に静かに声を掛けた。すると巧は顔に笑みを浮かべて剣崎に応えた。
「あいつはあいつのやりたい事があるんだ。俺達は俺達のやりたい事をやれば良いんだよ。」
「だが……」
「それに本当はお前が一番ディケイドを倒す事を嫌がってるんじゃないのか？」
「…何……？」
何と巧は剣崎が士を倒すのを拒んでいると言い出した。
巧と剣崎の目が合う。それから2人は別に何も言わなかったが、彼等は会話をしていない訳では無い。ちゃんと目と目で会話をしている……。
「ふっ。何を馬鹿な……」
「さぁ、俺達も戻ろうぜ。あいつ等が待ちくたびれてるだろうしな。」
剣崎は今までに見せなかった笑顔で嘲笑。巧もそんな彼の背中をポンと叩いて、彼と共に仲間の待つ場所にへと向かっていった……。

士と夏海、2人の前に立ち塞がるこれまでの強敵達。
バッファローロードにビートルファンガイア。タイガーオルフェノクにアリゲーターイマジン。他にもパラドキサアンデッドにフィロキセラワーム。
そしてその奥に立つ白い服に身を包むアポロガイストの正体でもある男、ガイ。
絶体絶命の2人。士はたった1人でも戦おうとしている様だ。だがそこに……。
「士！」
ポケットに手を入れて、彼等の許にへと歩み寄っていくのは海東。彼は士という仲間の為に立ち上がったのだ。

「僕もお宝の為に戦おう。世界なんて貰ってもつまらない。僕達はやっぱり……仲間って奴かもしれないね。」
その海東の言葉に思わず頬が緩む士。彼は海東の仲間という言葉が嬉しかった。今まで仲間という言葉を表面上で嫌がっていた2人が、この状況の中で初めて仲間として結託したのだ。
「俺も一緒だ、士！！」
「ユウスケ……。」
そして決意を固めたユウスケも駆け付けた。
士は驚いた表情を取ったが、それに対してユウスケの顔には先程の様な迷いは見られない。
「俺は自分の世界と仲間の命を天秤に掛けて……迷っていた。…でもそれは間違っていたんだ。たった1人の笑顔を守れないんじゃ、世界中の人を……笑顔になんか出来ない！！」
彼もまた海東と同じ様に士に歩み寄っていく。驚きの表情だった士も、徐々にその顔は笑顔にへと変わっていった。
「私達は……その事を旅で学んだんです。」
そして夏海のこの言葉。士ももう迷いはしない。目の前の敵を仲間達と共に倒す為に戦う。

「俺達はこれからも旅を続ける……世界の壁を越え、仲間を作る。その旅はやがて……未来を変える！！」

彼等の集まりなど無駄だと言い張るガイに向かって、士の口から言葉が出てきた。
それは、彼が今日此処に来るまでに旅で学んだ全ての事。そして仲間という存在……。
仲間がいる限り、士は戦える。仲間と共に戦う限り、士は何度だって立ち上がれる。
「何なんだ貴様は！？」
「通り過がりの仮面ライダーだ。…覚えておけ！」

ディケイドライバーを腹部に取り付け、「ＤＥＣＡＤＥ」のカードを手に持つ士。海東もディエンドライバーを構えて、「ＤＩＥＮＤ」のカードを手に持った。
そしてユウスケも……。

「「「変身っ！！！」」」

―ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ―

―ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＩＥＮＤ―

掛け声と共に夏海の前でそれぞれのライダーに変身していく士達……。

士はマゼンタのスーツに身を包み、緑の眼を持った世界の破壊者と謳われる仮面ライダーディケイドに……。
海東は３つのシルエットに囲まれて、シアンと黒のカラーの仮面ライダー、銃撃戦を得意とする仮面ライダーディエンドに……。
そしてユウスケも、再び仮面ライダークウガにへと……。
変身を終えた３人の仮面ライダー達は、最後の戦いの中にへと飛び込んでいく。大ショッカーと仮面ライダーによる最終決戦、その戦いが今幕を開けたのだ……。
もう小野寺ユウスケには迷いは無い。例えどんな結末が待っていたとしても、仲間と一緒ならきっと大丈夫だ。絶対に乗り越えられる。

そう、仲間と一緒なら……。

（後書き）

如何でしたでしょうか。私なりに知恵を振り絞って考えてみた小話です。

私ずっと五代の存在に触れるような内容が出てこない事に不満がありまして、どうせならといった感じで書いた次第であります。皆様、楽しんで頂けたでしょうか？

物語的にはハッピーな感じですが、でもやっぱり終わり方は「ディケイドォッ！？」で終わりです。五代さん、世界は駄目だったよとか言っちゃいそうですが、そこは触れないで下さい。

私としては、もうあの銃弾で終わり。解散で良いかもとか考えていたりしています。それでその後の彼等を想像してみました。

門矢士　死亡

光夏海　強制送還、笑顔が無くなる。

海東大樹　行方不明

小野寺ユウスケ　精神崩壊

光栄次郎　強制送還

キバーラ　行方不明

世界は無事に守られました。めでたしめでたし……。

あ～、石投げないで下さい石を！？　だって死ネタ好きなんだもんっ！！

という訳で今回はこの辺りで、皆様御愛読有難うございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9410k/

DECADE FINAL EPISODE OF KUUGA

2010年10月8日14時30分発行